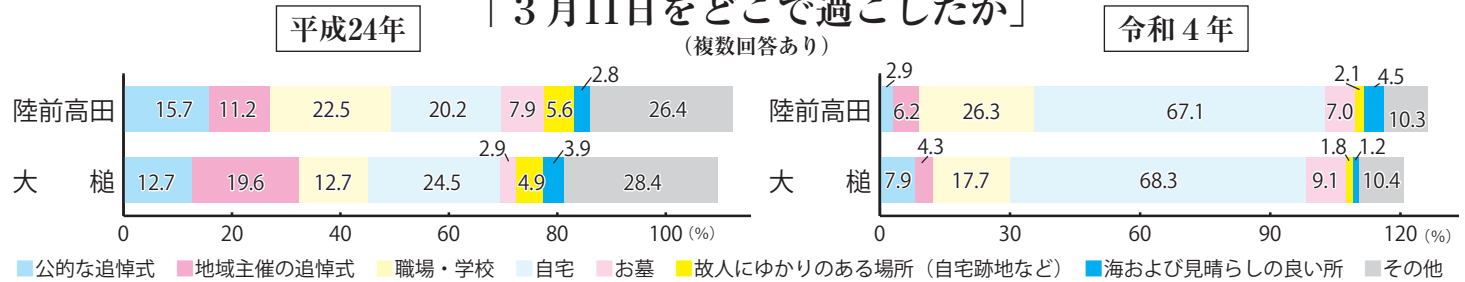


「3月11日をどこで過ごしたか」



きょう震災12年11カ月

「3・11を過ごす場所」アンケート

陸前高田市などで実施 10年間での変化浮き彫りに

令和4年12月に神戸大学都市安全研究センターの近藤民代教授と、岩手大学地域防災研究センターの坂口奈央准教授が陸前高田市などで共同実施した「東日本大震災と居場所の変化」に関するアンケートのうち、主に「3月11日を過ごす場所」についての調査結果がこのほどまとまった。震災翌年の平成24年から令和4年までの10年間で、被災者や震災遺族の行動・心情にどのような変化があったのかの数値に表れており、震災から間もなく13年を迎える被災地において、今後の「追悼のあり方」を考えるうえでの手がかりにもなりそう。

(鈴木英里、1面脇に関連記事)

アンケートは、陸前高田市と大槌町、宮城県石巻市の2市1町で実施。本県最大の被害を受けた陸前高田市における調査には東海新報社が協力した。

同市での対象は高田・今泉両地区の災害公営住宅入居者や、高台などに自宅再建した被災住民とし、▽東日本大震災前と後で自分の「居場所」と思える場所がどう変化したか▽新しく整備された施設・遺構についてどんな思いを持っているか▽震災日であり、遺族にとっては命日にあたる3月11日をどこで過ごすか――

最大の変化は「自宅」で過ごす人の増加。陸前高田では20・2%から67・1%に、大槌では24・5%から68・3%と、いずれもおよそ3倍に増え、全体の7割近くを占めている。坂口准教授は「復興事業がほぼ完了し、現在の居住地である自宅が『安心して、静かに過ごせる場所』となっていくことができる」とする。

また、これに伴った変化の一つと考えられるのは、平成24年には割合として最も多かった「その他」の回答が、陸前高田では26・4%から10・3%に、大槌では28・4%から10・4%に、いずれも減少している。平成24年は震災からまだ1年と、プライベートで過ごせる空間(自宅等)が物理的に存在していなかったことに起因すると推測できる。

加えて、回答者の割合のうち約半数以上が、陸前高田・大槌ともに65歳以上であった点も踏まえ、坂口准教授は「被災者や遺族が高齢となり、出歩くのが難しくなっていることも『自宅』と答える人が増えた要因ではないか」とみる。

他方、同准教授は「『公的な追悼式』に出席する場所」を求めると、3月11日は落ち着ける場所で静かに過ごしたいと考える人が多いこともうかがえる。

同時に、「3月11日を誰と過ごすか」という質問に対して、最も多かった答えは「家族・親戚」で、陸前高田・大槌ともに67%以上が回答。次いで多かったのが「1人」という答えで、両市町ともに3割近くを占めた。

以上のことを総合し、同准教授は「被災地の方々は3月11日をとてもプライベートな日ととらえ、内輪の人たちと静かに過ごすことを望んでいると言えるのではないかとする。

そのうえで、「この日は一般的な『命日』とは異なり、それぞれのとらえ方は多種多様。ひとくくりにすることはできない」と、アンケートや聞き取り調査を通じてよく分かった。また数値としては見えにくいのが、『海の見晴らせる場所』で過ごすという回答もあり、津波災害という特性や、三陸の方たちの海との向き合い方が背景にあることもうかがえる。こうした『祈念の日』に海と向き合う行為について今後分析していきたい」としている。

心の居場所どこに